

日本近代音楽館所蔵資料紹介(二)

## 大田黒元雄文庫収蔵

### ドビュッシー『ペレアスとメリザンド』初版スコアをめぐる

末永 理恵子  
森本 美恵子

二〇一二年はドビュッシー (Claude Achille Debussy 一八六二年八月二日生～一九一八年三月二五日歿) の生誕一五〇年を記念し、各地でイベントが行われました。これに因んで日本近代音楽館所蔵の貴重資料の中から、一九〇二年に刊行された『ペレアスとメリザンド』の初版スコアと大田黒元雄文庫について紹介します。

\*

#### 一 『ペレアスとメリザンド』初版スコア

*Pelleas et Mélisande* : *Drame lyrique en 5 actes et 12 tableaux / de Maurice Maeterlinck ; musique de Claude Debussy. Partition pour chant et piano.* Paris : E. Fromont, 1902. 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館大田黒元雄文庫蔵

ドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』は、モーリス・

メテララーノック (Maurice Maeterlinck, 一八六二—一九四九) の戯曲によるオペラで、一九〇二年四月三〇日にパリのオペラ・コミック座で初演された。スコアはパリのフロモン社 (E. Fromont) から出版された。初版年は、ピアノ・ヴォーカル・スコア (全二八三頁) が一九〇二年、フル・スコア (全四〇九頁) が一九〇四年である。

日本近代音楽館所蔵の資料は一九〇二年出版のピアノ・ヴォーカル・スコアで、目次頁の裏に、五〇部を和紙、五〇部をオランダ紙<sup>1</sup>に、番号を振って印刷した、と記され、限定出版であったことがわかる。このスコアには「14」の数字が刻印されており、印刷用紙には縦縞が入っている。おそらくオランダ紙であろう。

さらにその下には黒と赤のインクで、作曲家自筆の献辞が書き込まれている。(図版1)

「ピエール」という友人に贈ったスコアであることは明らかであるが、残念ながら資料上に姓を特定できる記述はなく、鑑定書なども残されていない。親称で話すような親しい友人であるにもかかわらず、出版後一年も経ってからスコアを贈って詫びを入れている、というところに、何か事情がありそうな気配が感じられる。

ドビュッシーの親しい友人の「ピエール」と言えば、詩人・作家のピエール・ルイス (Pierre Louÿs, 一八七〇—

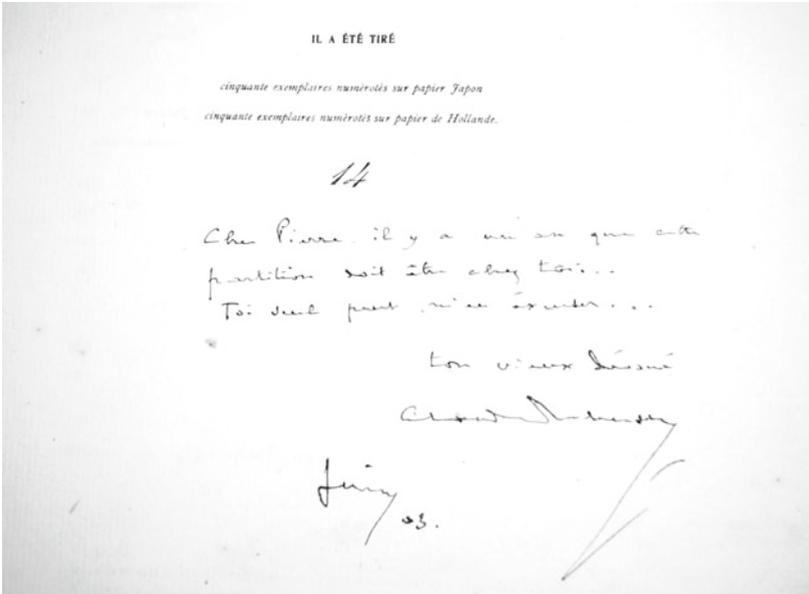
一九二五) がまず思い浮かぶが、書簡集 *Claude Debussy: Correspondance 1884-1918*<sup>2</sup> の索引に登場する名前を調べてみたところ、Pierre の名をもつ人物宛の書簡は、ピエール・ルイス宛以外に、評論家のピエール・ラロ (Pierre Lalo, 一八六六—一九四三、作曲家エドゥアール・ラロの息子) 宛のものが若干収録されていた。ルイス宛書簡は一貫して親称が用いられているのに対し、ラロ宛の手紙では一九〇三年以前も以後も敬称が用いられているため、館蔵の『ペレアス』のスコアを贈られた人物はルイスである可能性が高い。

また、一九〇三年六月にドビュッシーがルイスに『ペレアス』の楽譜を贈ったことが知られており<sup>3</sup>、時期的にもびつたり符合している。

さらに、大田黒元雄旧蔵資料であるこのスコアの見返し(遊び紙)には、大田黒元雄が一九二八年にパリで買い求めたことを記す書き込みがある (『M. Ohragano Paris Sept. 6th 1928』)。一九二八年はルイスが没した三年後であり、遺品の整理によって古書店等に蔵書が出回ったと見ても不自然ではない。

以上の理由から、このスコアはルイスに贈られたものであるとうと見当をつけ、ルイスとドビュッシーの書簡集<sup>4</sup>を調べたところ、確かにルイスに寄贈されたスコアであることが判明した。この書簡集に掲載されている献辞は、*Catalogues de la Bibliothèque de feu M. Pierre Louÿs* (故ピエール・ルイス氏蔵書目録) を典拠としているため、改行の位置と日付の書き方

【図版1】



Cher Pierre, il y a un an que cette  
partition doit être chez toi ...  
Toi seul peux m'en excuser ...  
ton vieux dévoué  
Claude Debussy  
juin / 03.

親愛なるピエール、このスコアが君のもとに届けら  
れるべき時から一年が経ってしまった…  
だが君だけは僕を許してくれるだろう…  
君の古き忠実な友、  
クロード・ドビュッシー  
03年6月

(上3行が黒インク、以下は赤インクで書かれている)

に若干違いが見られる<sup>5</sup>が、まさに同じものである。典拠の『ピエール・ルイス氏蔵書目録』は、一九二六年四月一五日から一七日にかけて、および一九二七年四月四日から九日にかけて行われた競売の目録である。原稿やメモ、蔵書、書簡、蔵書といったあらゆるものを保存していたルイスの死後、二万冊もの貴重な蔵書が売り立てられたとされるが<sup>6</sup>、このスコアはそのなかの一冊であった。カタログにこれだけの情報が記載されていたならば、大田黒が買い求めた際には、献辞についての正確な情報は得ていたものと見るべきであろう。

ピエール・ルイスはベルギー生まれの象徴派詩人・小説家で、一八九二年にマラルメの家でドビュッシーと知り合ったと言われる<sup>7</sup>。象徴派を代表する詩人、マラルメの自宅で毎週火曜に行われていた「火曜会」にルイスが初めて足を運んだのが一八九〇年六月、同じ年の秋にはドビュッシーが友人の詩人A・フェルディナン・エロルドに連れられて、初めて火曜会に出席した。また、エドモン・バイイが経営する独立芸術書房でも顔を合わせた。象徴主義の文学者やそれに共鳴する芸術家たちが集まるサロンのな書店で、ルイスの『ピリティスの歌』やドビュッシーの『選ばれた乙女』『ボードレールの五つの詩』もここから出版されている。親密な間柄になったのは一八九三年の夏が過ぎた頃からのようで、一八九三年七月にドビュッシーがルイスに『選ばれた乙女』のスコアを贈った時の献辞は「相当地よそよそしい」が、ルイスの兄宛での、一月の日付の手紙

に、「二ヶ月前から自分がしょっちゅうドビュッシーに会っている」と書いているという<sup>8</sup>。ドビュッシーとルイスの書簡集（参考文献1）を見ると、最初から四通目の手紙までは、かしまった形の文体となっている。四通目は日付不明だが、三通目には十月の日付がある（いずれもドビュッシー発信）。それから家を借りて共同生活することを計画するほどの親密さとなり、十一月には一緒にベルギーへ旅行にでかけている。

この旅行は、『ペレアスとメリザンド』の作者メテルランクに会うことが主目的であった。すでにメテルランクの作品に注目していたドビュッシーは、一八九二年に戯曲『ペレアスとメリザンド』が出版されるとすぐに魅了され、オペラ化を考え始める。翌年五月には、ルイスら友人たちとともにパリでの上演を観て、さらにオペラ化への思いを強くした。詩人のアンリ・ド・レニエに仲介を頼むと、メテルランクから、友人であるレニエが認めるのならば喜んで許可する、という趣旨の手紙が八月に届いた。すぐに作曲に取りかかった作曲家は、十一月の劇作家のもとへの表敬訪問の折に、削除部分についての許可と重要な示唆を得ている。この会見に同席したルイスは、無口な作曲家と音楽に明るくない劇作家の会話をなめらかにする役割を果たしたという。これと見込んだ友人には尽力を惜しまない性格であったといわれるルイスが、ドビュッシーのメテルランク訪問を目的とした旅行計画に付き合うなかで、二人の友情は急速に深まっていったとみられる。

二人で創作する計画はいくつも立てられたが、作品として結実した主なものは、ルイスの詩集『ピリティスの歌』による作品——三曲の歌曲と、朗読劇への付随音楽およびそれをピアノ連弾曲に編み直した『六つの古代碑名』——で、ほかは私的な作品と未完の断片が残されているのみである。これについてフランソワ・ルシユールは、「こうした一連の未完作品は、深い仲間付き合いの外観を越えたところから二人を引き離していた美学上の相違から、部分的には説明できる」<sup>9</sup>と述べ、ルイスは象徴派詩人と交流していたものの、考え方はむしろ高踏派的なところが多く、ドビュッシーの音楽も表面的にしかり理解していなかったため、象徴主義的芸術を突き詰めようとする作曲家とは根本的なところで相容れなかったのである<sup>10</sup>と考察を加えている。とは言え、ルイスは音楽にも造詣が深く、博識で多才であった。『ペレアスとメリザンド』の作曲を続けていた十年ほどの間に、ドビュッシーに大きな影響を与えたことは誰もが指摘するところである。経済的に困窮している作曲家を助けたことも何度かあり、また、精神的な危機やスキャンダラスな苦境にあったときの支えにもなった。特に一八九七〜九八年頃、私生活で悩みが絶えないうえに、心血を注いだ自信作『ペレアスとメリザンド』の上演を引き受ける劇場がなかなか見つからず、自殺も考えるほどであった作曲家を慰め励まし続けたのが、ほかならぬルイスであった。

こうした関係も、両者がそれぞれ結婚した一八九九年以降、

互いの家を行き来することが減って、希薄なものとなっていく。ルイスが親友としてのサポート力を発揮した最後の機会が『ペレアスとメリザンド』の初演の折で、一九〇二年四月末、つまり初演直前にルイスは「五人招待して一階ボックス席を喝采で一杯にするから、あてにしてくれたまえ。十九世紀以来、君を見かけることはほとんどなかったが、『ペレアス』に対する僕の意見は変わらないよ。ありがとう、そして幸運を祈る！」と、短い心のこもった応援の手紙を送っている<sup>10</sup>。

翌一九〇三年六月、ルイスは自身の小説集『多血質人たち Sanguines』（一九〇三）をドビュッシーに送り、ドビュッシーは出版後一年経過している『ペレアス』のスコアをルイスに送った。六月一七日付のドビュッシーからルイス宛の手紙では、そのことに触れられている。

一年以上前から君に会っていないといふとんでもない事実は、じゅうぶん死に値するかもしれないね…。

君は確かに僕の最愛の友人であり、君のいない寂しさを慰めるには、コミュニケーションする望みを持つのがまったく不可能なくらい遠い場所に君の顔があるのだと想像することしか方法がない。

時に君を見たときと断言する人がいると、僕は、その人たちがおかしい、と言うのだ！だが君の本が送られてくると、この夢の構成が少し乱れることになってしまう。僕

の目に涙があふれるのを想像してくれたまえ、君の力強い筆跡を再び見て、それほどまで感情的になっているのを……。追って君に、もっとひどいことを思い出させるものを送る。それにしても、これは悲しいことだ！ 君は君の本を僕に送り、僕はそれに僕の楽譜で答える。これは、死んだようなわずかな生でしかないね。

僕が、嘆息より、昔のようなかたい握手をどんなに望んでいることか！ それはいまやもう想像することしかできないが……。しかし、僕はいつも君にとっても思実だ、齡ともにいっそう激しく。

クロード・ドビュッシー<sup>11</sup>

この様子では、ドビュッシーはルイスに直接会ってスコアを渡したかったのかもしれない。しかし会うことは叶わず、本は送られて来たけれども、充分なコミュニケーションがとれないことを嘆いているようだ。同じ頃のルイスが書いた手紙には、ドビュッシーとの関係が疎遠になっていることについて書かれ、ドビュッシーの妻リリーの人となりが一因としてあげられているが、むしろルイスが「精神のおよび創造的な混乱状態に陥って」いたことが原因ではないかとルシュールは見ている<sup>12</sup>。両親を早くに亡くしたルイスは、一八九一年に余命三年と医者から言われて、相続した遺産を盛大につかいながら生活したため、この頃には困窮状態に陥つてもいた。女性関係の様々な問

題を抱え、創作の面でも売れる作品を書くことに疑問を持ち、一九〇二年頃からは思うように作品が書けなくなっていくのだった。こうした状況下でどんどん冷えて込んでいったドビュッシーとルイスの友人関係は、一九〇四年のドビュッシーの女性関係のスキャンダルによって終止符が打たれることになる。

大田黒元雄が購入した、作曲家の直筆サインと献辞入りの『ペレアスとメリザンド』のピアノ・スコアは、このオペラの成立の頃にひとかたならぬ尽力をした親友、しかもその作品が完成を見て初演され、出版されるまでの長い間、紆余曲折を経て関係が悪化しつつあった親友への贈り物であった。数少ない初版本として貴重であるのみならず、ピエール・ルイスとの交友を示すものとしても価値の高い資料と言えよう。

#### 註

- 1 オランダ紙 (papier de Hollande) は版画や限定版に使われる紙。レイド紙とも言い、簀の目模様 (縦縞) が入っている。
- 2 参考文献 2。
- 3 参考文献 5、二四三頁。
- 4 参考文献 1、一七三頁。
- 5 書簡集では『ペレアスとメリザンド』のスコアに書かれた献辞として、次のように記されている。  
Cher Pierre, il y a un an que  
cette partition doit être chez toi...

Toi seul peux m'en excuser ...

ton vieux dévoué.

CLAUDE DEBUSSY

juin 03

6 ルイスの妻であったアリーヌ Aline および彼女が一九二七年に再婚したセリエール Georges Serrières によって、もっぱら利益を求めて売りさばかれたため、多くが散逸してしまつたという(参考文献4、四八一頁)。

7 二人が知り合つた年には諸説あるが、参考文献5でルシュールは、ルイスの手書き原稿に「マラルメの家で知り合つた」と書かれていることと、ドビュッシーに贈られた詩人の作品『アフロディテ』の献辞に「僕たちの友情の最初の四年間、一八九二〜一八九五年」と明記されていることを論拠にあげて、一八九二年である可能性が高いとしている(一四四頁)。

8 参考文献5、一六〇頁。

9 参考文献5、一六八頁。

10 参考文献1、一七〇頁。

11 参考文献1、一七三頁。

12 参考文献5、二四二頁。

#### 参考文献

- 1 Henri Borgnaud (recueillie et annotée), Correspondance de Claude Debussy et Pierre Louÿs (1893-1904) (Paris : Librairie José Corti, 1945)
- 2 Lesure, François (réunie et présentée), Claude Debussy : Correspondance 1884-1918 (Paris : Hermann, 1993)

3 青柳いづみこ『ドビュッシー 想念のエクトプラズム』(東京書籍、一九九七年三月)

4 沓掛良彦『評伝ビエール・ルイス エロスの祭司』(水声社、二〇〇三年二月)

5 フランソワ・ルシュール著、笠羽映子訳『伝記クロード・ドビュッシー』(音楽之友社、二〇〇三年九月)

6 松橋麻利『ドビュッシー』(音楽之友社、二〇〇七年五月)

## 二. 大田黒元雄文庫のドビュッシー資料

### 大田黒元雄文庫の成り立ちと概要

評論家大田黒元雄(一八九三・一十一月〜一九七九・一・二三)の著書蔵書は、大田黒没後の一九七九年四月、長女鈴子氏よりNHKに寄贈されて以来、長くNHK音楽資料室の管理下にあった。しかし、蔵書を一括保管、公に供したい、という遺族の意志に対して、放送局内において資料を一般に開くことは難しく、方策を求めて検討が重ねられてきた。大田黒蔵書の日本近代音楽財団日本近代音楽館への移管はこのような状況で行われ、大田黒家の承諾を得て音楽館内に「大田黒元雄文庫」が設置されたのは、一九九八年九月二四日のことである。二〇一〇

年七月、日本近代音楽財団の明治学院への資料寄贈に伴い、この記念文庫も明治学院大学図書館付属日本近代音楽館に移設された。

「大田黒元雄文庫」は、大正・昭和期、日本のクラシック音楽界において多くの著作、翻訳を通じて普及啓蒙に貢献した大田黒の音楽活動の精華であり、その礎となった資料群である。大田黒の業績に鑑みて、西洋音楽受容史の観点からも重要度が高い。資料は膨大で多岐に亘るが、種別と数量の概要は左記のとおりである。

大田黒の著書・訳書百、音楽書（和書、洋書）九百、その他の書籍（文学書、美術書を中心とする。おもに洋書）三千、楽譜（主として洋楽譜）二千以上、レコード百五十、雑誌（和雑誌、洋雑誌。音楽関係以外の主題を含む）、国内外の演奏会プログラムなど。

### 大田黒蔵書の形成とその性格

一九一四（大正三）年、大田黒は足かけ三年に及ぶロンドン留学から一時帰国した。その後公刊されたエッセイや研究を通じて、人々はヨーロッパの「今」の息遣いとともに大田黒とその蔵書の存在を知る。著述、講演、レコードコンサート、提供された楽譜による演奏に触れた人々の興奮、憧憬は想像するに

難くない。堀内敬三の言葉を引く。「私は近代フランス音楽の宝庫を見た。近代ロシア音楽の妙味を悟った。初めて世に出た大田黒元雄の名著「パツハよりシエンベルヒ」を読み、其の著者から親しく色々な未知の名曲をピアノで弾いてもらひ、かうして私の音楽智識は急激に進んだ。ヴィクターの黒盤に十二時両面で「牧神の午後」が入つたのは此の頃だつた。ローレンス、ギルマン、アーネスト、ニューマン、ジェームス・ハネカーの音楽論集を大田黒元雄から教へられて読み、ドビュツシー其他の近代楽曲を日本楽器の多米さんを通じて取寄せて、私は飽くなき好奇心を満足させやうとした。」<sup>1</sup>また、野村光一は初めて大田黒邸を訪れた日について書く。「その「IIピアノ」上に大版の楽譜がうづ高く積まれてゐる。よく見るとそれ等の殆んど総てはけばけばしい色彩で裝飾されている頗る豪華な表紙である。私は斯様な優美な楽譜を嘗つて観たことがない。その作者も楽曲も亦今迄に名前を微に耳にしてゐたが、楽譜としての実体は嘗て一度も観たことがないものばかりである。私は此処で生まれて始めてデューラン版の典雅なドビュツシーやラヴェルのピアノ楽譜、ペライエフやロシア音楽出版協会版のスクリアビン、ラフマニノフ等のピアノ曲、それにムソルグスキー、リムスキー・コルサコフ、ボロディン、ストラヴィンスキーなどの歌劇物楽譜を観たが、その中で、殊に黄や赤の原色で彩られたロシアの原始的な民族模様で被はれた之等の歌劇楽譜は全く讚嘆に値したものであつた。」<sup>2</sup>

『バッハよりシェーンベルヒ』（山野楽器店、大正四年五月）は大田黒の最初の音楽書で、一時帰国の後、第一次世界大戦開戦の影響で再渡欧できなくなった大田黒が山野政太郎に勧められた書いた作曲家の評伝集である。本文六十人、附録に百人の作曲家を収録し、なかでも、当時日本国内ではあまり知られていなかった同時代人たち、デビュッシー（ドビュッシー）、シベリウス、ストラヴィンスキイ、シェーンベルヒ（シェーンベルク）らに向ける眼差しは実に新鮮である。執筆について、大田黒は言う。「……書くと言つても、自分の持つて居た本や楽譜だけを使つて書いたんだから知らないものは委しく書けませんでした。」「参考書は」使つたには使つたけれども何しろ少いですからね、……第一その頃は丸善に行つたつて音楽書なんかは実になかつたんです。<sup>3</sup>

同時代のヨーロッパ音楽に対する興味と共感は大いに若者たちの関心を呼んだ。しかし、こうした研究や実践に必要な書籍や楽譜は、国内では、入手はもとより存在を知ることさえ難しかった。大田黒の蔵書は、外遊先で、また、国内では共益商社や丸善を通して丹念に集められたものである。時には、友人で外交官の二見孝平が——彼自身も熱心な音楽書の収集家であるが——大田黒に協力することもあったという。

### 大田黒蔵書に見るドビュッシー

大田黒にはドビュッシーに関する著書が三冊ある。『ドビュッシー』（第一書房、一九三二年十月）、『ドビュッシーの生涯』（アポロ出版社、一九四八年七月）、『ドビュッシー評伝』（名曲堂、一九五一年五月）である。これらは「デビュッシー研究」（『音楽』五巻十号（大正三年十月））に始まる論考の延長上にあり、各序文が明らかにするように再版増補の關係にはない。「予てからドビュッシーの生涯と芸術とに関する著作を行はうと考へてゐる私は、まづその生涯の部分だけを脱稿したのであつた。」（第一書房）「第一書房から『ドビュッシー』として出版された……戦争のために久しく絶版になつていたのであるが、幸にもアポロ出版社から復刊されることになつたのを好機として、新しい文献に従ひながら私は旧著の内容を徹底的に一新し、書名もまた『ドビュッシーの生涯』と改めることにしたのである。」（アポロ社）「私はいままでに二度ドビュッシーに関する書物を出しているが、今度のはまったく新しく書いたものであつて、内容の点でかなり前のはちがつている」（名曲堂）

巻末にはそれぞれ参考書目が掲載されている。当然のことながらすべて洋書で、第一書房版は二二冊と書簡集三冊、アポロ社版では一九三二年、一九三六年刊行の二冊が加わり、名曲堂版はアポロ社版と同一である。一方、大田黒文庫に収められているドビュッシー研究書は二〇冊で（重複タイトルを除く）、

参考書目掲載のうち十六冊を含む。このうち、書込みからロンドンで購入されたことが明らかな書籍は、Leibich, Louise. (参考書目では Mrs. Franz Liebich) *Claude-Achille Debussy*: London: John Lane, 1908のみで、他の多くが東京で入手されていることは興味深い。残る四冊のうち二冊は戦後の刊行物で別に、書簡集二冊と、著書 *Monstieur croche, the dilettante bates, from the French of C. Debussy*: London, N. Douglas, [1927] が含まれている。別表1にアポロ社版の参考書目を挙げ、文庫収蔵資料に\*を付した。

ロンドンから帰国した大田黒は、自邸で堀内敬三、野村光一らとサロンコンサート「ピアノの夕」を開き(第一回「ドビュッシーの夕」一九一五年十二月十八日)、また、一九一六年三月一九日には音楽普及会演奏会に出演、ドビュッシー「沈める寺」などを披露したが、圧巻は一九一六年十二月に開催された「スクリアピンとドビュッシーの夕べ」であろう。ロンドンから持ち帰った楽譜によって、スクリヤーピン九作品とともに、ドビュッシー「アラベスク第一番」「月の光」「小舟にて」「牧神の午後への前奏曲」「神聖な踊り」「雨の庭」「子供の領分」より二曲「沈める寺」「亜麻色の髪のおとめ」「おもちゃ箱」を演奏した。

大田黒文庫に残るドビュッシーの単行譜を別表2に挙げる。器楽曲では、ピアノ曲とピアノ・リダクシオン、ピアノ・アレンジが目を引く。自ら演奏する(できる)楽譜を購入したものの

であろう。また、書込み等で明らかな楽譜の購入場所はロンドンあるいは東京であり、唯一の例外は *Pelléas et Mélisande* である。一九二八年、パリで購入したドビュッシー作品はほかになく、この楽譜が他とは違う状況で入手されたことを推測させる。一九二八年は三度目の外遊中にあたり、「此の楽劇ほど仄かな美しさを持つた旋律に富む作品を聴いたことがない」<sup>4</sup>と激賞する作品の稀覯本は、特別なルートを経て大田黒の手に渡ったものであろう。

最後に、「スクリアピンとドビュッシーの夕べ」曲目解説に掲載された出版予告を引く。「大田黒元雄氏」クロード・ドビュッシー「明年三月刊行予定 音楽と文学社 クロード・ドビュッシーの出現は音楽史上の驚異なり。彼は其の比類なき天分に依つて音楽に於ける未知の世界を開拓し、此れを後代に遺さんとす。彼の芸術の真価は著者が熱心なる研究と評価とに依りて始めて明かなり。此の天才の研究中本書の如く詳細なるは外国書中にも得難きところ、敢えてこゝに此の良書の刊行を予告す。ドビュッシーを知らずして今日の音楽を語るは愚也」。出版には至らず、他にこの書籍に関する言及もない上、『歌劇大観』執筆中のこの時期、本当に出版が計画されていたのかどうか、疑わしい面もないわけではないが、大田黒のドビュッシーに寄せる熱い想いを余すところなく伝えていく。

註

- 1 堀内敬三「『音楽と文学』の頃」『音楽雑誌ファイルハーモニー』三巻五号（昭和四年五月）、十頁。
- 2 野村光一「音楽青春物語」湖山社、昭和二四年七月、六〇頁。
- 3 「大田黒元雄氏を中心にした座談会」『音楽世界』七巻四号（昭和十年四月）、八六頁、八七頁。
- 4 大田黒元雄「華かなる回想」第一書房、大正十四年四月、一四五頁。

\* 「一」『ペレアスとメリザンド』初版スコア」は末永理恵子が「二」大田黒元雄文庫のドビュッシー資料」は森本美恵子が執筆した。

## 【別表 1】

---

### 参考書目

---

- W. H. Daly: Debussy. Methuen Simpson, Edinburgh, 1908. \*
- Mrs. Franz Liebich: Claude-Achille Debussy, John Lane, London, 1908. \*
- Louis Laloy: Claude Debussy. Dorbon ainé, Paris, 1909. \*
- Giacomo Setaccioli: Claudio Debussy. Musica, Roma, 1910. \*
- Daniel Chennevière: Claude Debussy et son oeuvre. Durand, Paris, 1913.
- Numéro spécial de L'Echo Musical—Claude Debussy. Paris, Nov., 1919.
- E. Vuillermoz: Claude Debussy. Heugel, Paris, 1920.
- Numéro spécial de la Revue Musicale—Debussy. Paris, Dec., 1920.
- André Suarés: Claude Debussy. Emile-Paul, Paris, 1922. \*
- L. Fábíán: Claude Debussy und sein Werk. Drei Masken Verlag, München, 1923. \*
- Luigi Perrachio: L'Opera pianistica di Claudio Debussy. Bottega di Poesia, Milano, 1924. \*
- F. H. Shea: Debussy and Ravel. Oxford University Press, London, 1925. \*
- Numéro spécial de la Revue Musicale—La Jeunesse de Claude Debussy. Paris, Mai 1926.
- Maurice Emmanuel: Pelléas et Mélisande. Mellottée, Paris, 1926. \*
- Robert Jardillier: Pelléas. André Delpeuch, Paris, 1927.
- Rient van Santen: Claude Debussy. Kruseman, Hague, 1927. \*
- Charles Koechlin: Debussy. Laurens, Paris, 1927. \*
- Léon Vallas: Claude Debussy. Plon, Paris, 1927. \*
- Léon Vallas; Les idées de Claude Debussy. Librairie de France, Paris, 1927. \*
- Maurice Boucher: Claude Debussy. Rieder, Paris, 1930. \*
- Jean Lépine: La vie de Claude Debussy. Albin Michel, Paris, 1930.
- René Peter: Claude Debussy. Gallimard, Paris, 1931.
- Léon Vallas: Claude Debussy et son temps. Alcan, Paris, 1932. \*
- Edward Lockspeiser: Debussy. Dent, London, 1936. \*
- 
- J. Durand: Lettres de Claude Debussy à son éditeur, Durand, Paris, 1927. \*
- Louis Laloy: La musique retrouvée. Plon, Paris, 1929.
- Correspondance de Claude Debussy et P.-J. Toulet. Le Divan, Paris, 1929. \*
-

## 【別表2】

購入地	購入日付	ジャンル	タイトル	出版者	刊年	備考
ロンドン	1914.06.13	舞台作品	Jeux. Partition pour piano réduite par l'auteur.	Durand	c1912	
ロンドン	1914.02.25	ピアノ曲	Images.	A. Durand	c1908	
ロンドン	1914.04.28	ピアノ曲	La plus que lente.	Durand	c1910	
ロンドン?	n.d.	ピアノ曲	[2 arabesques]	Durand	[191-]	Copyright by A. Durand & fils, 1904. 表紙欠
ロンドン?	n.d.	ピアノ曲	[Masques]	A. Durand	c1904	表紙欠
ロンドン?	n.d.	ピアノ曲	Children's corner.	A. Durand	c1908	
ロンドン	1914.02.11	室内楽曲	Danses pour harpe chromatique ou harpe à pedales, ou piano avec acc <sup>t</sup> d'orchestre d'instruments à cordes. Transcription [pour piano] à 2 mains par Jacques Durand.	Durand	c1910	
ロンドン	1914.06.13	管弦楽曲	Nocturnes. II. Fêtes. Transcription pour piano par Leonard Borwick.	E. Fromont	c1914	
パリ	1928.09.06	舞台作品	Pelléas et Mélisande. Partition pour chant et piano.	E. Fromont	c1902	
東京	1917.05	舞台作品	Khamma. Partition pour piano réduite par l'auteur.	Durand	c1912	
東京	1920	舞台作品	Pelléas et Mélisande. Partition d'orchestre.	A. Durand	[190-]	Copyright by E. Fromont, 1904. Study score.
東京	n.d.	舞台作品	Le martyr de Saint-Sébastien : Mystère en cinq actes de Gabriele d'Annunzio. Partition pour chant et piano. Transcription par André Caplet.	Durand	c1911	
東京	1919	声楽曲	Trois chansons de Charles d'Orléans.	Durand	c1908-1910	
東京	1919	声楽曲	Le promenoir des deux amants. Poème de Tristan Lhermite, English words by Nita Cox.	A. Durand	c1910	
東京	1920.11	声楽曲	L'enfant prodigue. Nouvelle édition. Partition chant et piano.	A. Durand	c1908	書込
東京	1920	声楽曲	Nuit d'étoiles. Poésie de Th. de Banville, English words by Fanny S. Copeland. No.2 pour Baryton.	E. Coutarel	c1910	
東京	1920	声楽曲	Trois mélodies de Claude Debussy. La belle au bois dormant. Poésie de E.V. Hyspa.	Société d'éditions musicales	[n.d.]	For voice and piano.
東京	1920	声楽曲	Trois mélodies de Claude Debussy. Paysage sentimental. Poésie de P. Bourget.	Société d'éditions musicales	[n.d.]	For voice and piano.
東京	n.d.	声楽曲	Les Angelus. Poésie de G. Le Roy.	J. Hamelle	[n.d.]	表紙欠
東京	n.d.	声楽曲	Dans le jardin. Poésie de Paul Gravallolet.	J. Hamelle	c1905	For voice and piano.
東京	n.d.	声楽曲	Cinq poèmes de Charles Baudelaire. English words by Nita Cox, Deutsche Uebertragung von M.-D. Calvocoressi.	A. Durand	c1906	

東京	n.d.	声楽曲	Comes the spring. Paul Bourget, English version by M. Louise Baum. Edited by H. Clough=Leighter.	Boston Music Company	[n.d.]	Copyright by G. Schirmer, 1911.
東京	n.d.	声楽曲	Quatre mélodies de Debussy.	La revue musicale	1926	Supplément de la Revue musical (Mai, 1926)
東京	n.d.	声楽曲	Trois poèmes de Stéphane Mallarmé pour chant et piano.	Durand	c1913	
東京	n.d.	声楽曲	La mer est plus belle. Poésie de Paul Verlaine. Edition pour mezzo-sopr. ou baryton.	J. Hamelle	[n.d.]	
東京	1916	ピアノ曲	Pour le piano.	E. Fromont	c1901	
東京	1916	ピアノ曲	Suite bergamasque.	E. Fromont	c1905	
東京	1917.05	ピアノ曲	A la fontaine, extrait des Douze pièces pour piano à 4 mains par Robert Schumann, op.85. Transcription pour piano à 2 mains par Claude Debussy.	Boston Music Company	[n.d.]	
東京	1917.05	ピアノ曲	Six épigraphes antiques. Transcrits pour piano à 2 mains par l'auteur.	Durand	c1915	
東京	n.d.	ピアノ曲	Ballade pour le piano.	E. Fromont	[n.d.]	
東京	n.d.	ピアノ曲	Danse pour le piano.	E. Fromont	[n.d.]	
東京	n.d.	ピアノ曲	Deuze études pour le piano. Livre I.	Durand	c1916	
東京	n.d.	ピアノ曲	Hommage à Haydn pour le piano.	Durand	c1910	
東京	n.d.	ピアノ曲	Valse romantique.	E. Fromont	[n.d.]	
東京	n.d.	ピアノ曲	Marche écossaise sur un thème populaire.	E. Fromont	[n.d.]	4 hands.
東京	n.d.	ピアノ曲	Petite suite. Transcription pour piano à 2 mains.	A. Durand	c1906	Transcription à 2 mains par Jacques Durand.
東京	n.d.	ピアノ曲	Six épigraphes antiques pour piano à 4 mains.	Durand	c1915	
東京	n.d.	ピアノ曲	En blanc et noir trois morceaux pour 2 pianos à 4 mains.	Durand	c1915	
東京?	n.d.	ピアノ曲	En blanc et noir trois morceaux pour 2 pianos à 4 mains.	Durand	c1915	表紙欠
東京	1917	室内楽曲	Sonate pour violon & piano.	Durand	c1917	Score & part.
東京	n.d.	室内楽曲	Petite pièce pour clarinette. Transcription pour piano à 2 mains par Jacques Charlot.	Durand	c1911	裏表紙欠
東京	n.d.	室内楽曲	Sonate pour flûte alto et harpe.	Durand	c1916	Score & parts.
東京	n.d.	管弦楽曲	Iberia. Transcription à 4 mains par André Caplet.	Durand	c1910	
東京	n.d.	管弦楽曲	La mer.	A. Durand	1905	Study score.
東京	n.d.	管弦楽曲	Nocturnes. III. Sirènes. Transcription pour 2 pianos 4 mains par Maurice Ravel.	E. Fromont	c1909	
東京	n.d.	管弦楽曲	Printemps paraphrase. Transcription pour piano par Léon Roques.	Durand	c1910	

大田黒元雄文庫収蔵 トビュッシー『ベレアスとメリザンド』初版スコアをめぐって

東京	n.d.	管弦楽曲	Rondes de printemps : "Images" pour orchestre no.3. Transcription [pour piano] à 4 mains par André Caplet.	Durand	c1910	
東京	n.d.	管弦楽曲	Première rhapsodie pour orchestre avec clarinette principale en si b. Transcription pour piano 2 mains par Jacques Charlot.	Durand	c1912	
東京	n.d.	管弦楽曲	Gigues : "Images pour orchestre" no.1.	Durand	c1913	Study score.
東京	n.d.	管弦楽曲	Rapsodie pour orchestre et saxophone. Réduction pour saxophone et piano.	Durand	c1919	Score & part.
東京	n.d.	管弦楽曲	Prélude à "L'après-midi d'un faune". Partition d'orchestre.	E. Fromont	[n.d.]	
記載なし	n.d.	声楽曲	The blessed Damosel. English poem by D.G. Rosetti. Partition chant et piano.	A. Durand	c1908	
記載なし	n.d.	声楽曲	2 mélodies pour une voix avec accompt de piano. Le son du cor s'afflige. Poésie de Paul Verlaine.	E. Fromont	[n.d.]	
記載なし	n.d.	声楽曲	2 mélodies pour une voix avec accompt de piano. L'echelonnement des haies. Poésie de Paul Verlaine.	E. Fromont	[n.d.]	
記載なし	n.d.	声楽曲	Douze chants aves acc <sup>t</sup> de piano.	A. Durand	c1906	
記載なし	n.d.	ピアノ曲	Images. 1 <sup>re</sup> série pour piano à 2 mains.	A. Durand	c1905	
記載なし	n.d.	ピアノ曲	Mazurka pour le piano.	E. Fromont	[n.d.]	
記載なし	n.d.	ピアノ曲	Rêverie pour le piano.	E. Fromont	[n.d.]	
記載なし	n.d.	ピアノ曲	Sarabande orchestrée par Maurice Ravel.	Jean Jobert	c1923	
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Nocturnes. Partition d'orchestre.	Jean Jobert	[n.d.]	Copyright by E. Fromont, 1909.
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Ibéria : "Images" pour orchestre no.2.	Durand	c1910	Study score.
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Rondes de printemps : "Images" pour orchestre no.3.	Durand	c1910	Study score.
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Première rhapsodie pour orchestre.	Durand	c1910	Study score.
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Le martyr de Saint Sébastien.	Durand	c1912	Study score.
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Jeux. Partition d'orchestre.	Durand	c1913	Study score.
記載なし	n.d.	管弦楽曲	Printemps : suite symphonique.	Durand	c1913	Study score.
他者旧蔵		室内楽曲	1 <sup>er</sup> quatuor pour 2 violons, alto et violoncelle.	A. Durand	[n.d.]	Study score. "Kazé Tanabé, October 1920"
他者旧蔵		管弦楽曲	Fantaisie pour piano et orchestre. Réduction de l'orchestre pour un second piano par Gustave Samazeuilh.	E. Fromont	c1919	署名「Kazuko Sekihara」